

難治性疾患克服研究における潰瘍性大腸炎に関する研究成果

【炎症性腸疾患に関する調査研究班（主任研究者）へのアンケート】

（調査期日：平成18年5月）

1. 初代研究班発足から現在までの間の研究成果について（特定疾患の研究班が独自に解明・開発し、本研究事業として公表したもの。なお、原則他の研究事業等に依存していないもの。）

（1）原因究明について（画期的又は著しく成果のあったもの）

	時期 及び 班長名（当時）	内容	備考
1			
2			
3			

※他の研究事業と分離不可の場合は、不可としその理由を簡単に記載してください。

（2）発生機序の解明について（画期的又は著しく成果のあったもの）

	時期 及び 班長名（当時）	内容	備考
1	平成6年、 武藤徹一郎	大腸上皮由来 IL-7 を介した粘膜内リンパ球増殖調節機構の異常	
2	平成15年、 日比紀文	HLA-DRB1*1502 が日本人潰瘍性大腸炎の疾患感受性遺伝子のひとつである	
3			

※他の研究事業と分離不可の場合は、不可としその理由を簡単に記載してください。

（3）治療法（予防法を含む）の開発について

ア 発症を予防し、効果があったもの

	時期 及び 班長名（当時）	内容	備考

1			
2			
3			

※他の研究事業と分離不可の場合は、不可としその理由を簡単に記載してください。

イ 完治に至らしめることはできないが、進行を阻止し、効果があったもの

	時期 及び 班長名 (当時)	内容	備考
1	平成 6 年 武藤徹一郎	SASP 不耐性症例に対するメサラジンの有用性	
2	平成 12 年 下山孝	白血球除去・吸着療法の有用性	
3	平成 12 年 下山孝	遠位潰瘍性大腸炎に対するメサラミン注腸療法	
4	平成 16 年 日比紀文	難治性潰瘍性大腸炎に対する経口 FK506	

※他の研究事業と分離不可の場合は、不可としその理由を簡単に記載してください。

ウ その他根本治療の開発について

	時期 及び 班長名 (当時)	内容	備考
1			
2			
3			

※他の研究事業と分離不可の場合は、不可としその理由を簡単に記載してください。

2. 「1」以外で、国内、国外を問わず、研究成果の現在の主な状況について

(1) 原因究明について (画期的又は著しく成果のあったもの)

	時期	内容	文献
1			
2			
3			

(2) 発生機序の解明について (画期的又は著しく成果のあったもの)

	時期	内容	文献
1	1988年	喫煙が発症予防因子である	Lindberg E et al.: Gut 1988, 29: 352-7
2	1994年	病態に抗ムチン抗体が関与している	Hibi T et al.: Gut 1994, 35: 224-30
3	2001年	若年期における虫垂切除が発症予防要因である	Naganuma M et al.: Am J Gastroenterol 2001, 96: 1123-6

(3) 治療法 (予防法を含む) の開発について

ア 発症を予防し、効果があったもの

	時期	内容	文献
1			
2			
3			

イ 完治に至らしめることはできないが、進行を阻止し、効果があったもの

	時期	内容	文献
1	1978年	重症潰瘍性大腸炎に対する選択的プロドニゾロン動注療法	朝倉均ら：日消誌 1978, 75: 818-25
2	1994年	Cyclosporine のステロイド抵抗性重症潰瘍性大腸炎に対する有効性	Lichtiger S et al.: N Engl J Med 1994, 330: 1841-5
3	1999年	非病原性大腸菌 (Nissle 1917) の投与がメサラジンと同等の緩解維持効果を有する	Rembacken BJ et al.: Lancet 1999 354: 635-9
4	2003年	抗 TNF- α 抗体 (Remicade) の難治性潰瘍性大腸炎への有用性	Gornet JM et al.: Aliment Pharmacol Ther 2003, 18: 175-181
5	2003年	ステロイド抵抗性潰瘍性大腸炎に対するヒト化型抗 IL-2R (CD-25) 抗体 (Basiliximab) とステロイド併用療法の有効性	Creed TJ et al.: Aliment Pharmacol Ther 2003, 18: 65-75
6	2003年	Epidermal growth factor (EGF) 注腸の軽症-中等症潰瘍性大腸炎に対する有効性	Sinha A et al.: N Engl J Med 2003, 349: 350-7
7	2004年	ヒト化型抗 CD3 抗体 (Visilizumab) のステロイド抵抗性重症潰瘍性大腸炎に対する有効性	Hommes D et al.: DDW 2004, Late Breaking Abstracts
8	2004年	ICAM-1antisense oligonucleotide enema の軽症・中等症遠位潰瘍性大腸炎に対する有効性	van Deventer SJ et al.: Gut 2004, 53: 1646-51
9	2004年	活動期潰瘍性大腸炎に対する豚鞭虫卵 <i>Trichuris suis ova</i> 反復投与の有効性	Summers RW et al.: Gastroenterology 2004, 126 (4), suppl.2: A-83

ウ その他根本治療の開発について

	時期	内容	文献
1			
2			
3			